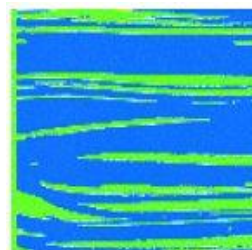


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2019年 春号 No. 94 (2019年4月27日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 坂上貴之
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

自主企画シンポジウム：日本におけるスクールワイドPBSの発展と継続性を支えるもの…大久保 賢一
行動数理研究会開催記：〈弱いロボット〉に関する講演……………佐伯 大輔・井垣 竹晴
春の学校開催記：2018年度 行動分析学会 春の学校を終えて……………野田 航
春の学校参加記：春の学校に思うこと3題……………井上 和哉
春の学校参加記：春の学校に参加して……………伊藤 真子
自著を語る：哲学特集……………坂上 貴之
「日本行動分析学会若手会」のご報告……………丹野 貴行
編集後記……………ニューズレター編集部

<自主企画シンポジウム：報告>

日本におけるスクールワイドPBSの 発展と継続性を支えるもの

大久保 賢一

(畿央大学)

昨年の第36回大会においては、学会企画シンポジウムにおいて初めて「学校規模で取り組むポジティブ行動支援 (SWPBS)」メインテーマに掲げて検討を行いました。学校場面には、様々な「壁」があり、学校場面における行動問題を解決するためには対象児童生徒の行動随伴性だけを分析するだけでは不十分であり、他の児童生徒や教職員を含む「学校全体」を巻き込まなければならないという「複雑さ」と「大変さ」

が、困難さの要因であることを確認しました。そして、特定の手続きが学校場面において効果的かつ持続的に実施されるための仕組みが必要であり、SWPBSは、まさにその目的を果たす仕組みの1つであるということについて実践報告を基に議論しました。今回のシンポジウムはその第2弾ということになります。

まず、わたくし大久保からは、「成果を土台とした自治体規模のスクールワイドPBSへの発

展」というテーマで、徳島県において2年間に渡って取り組んだ公立小学校における SWPBS の実践に関する成果と課題について報告しました。なお、この実践は現在自治体の全小学校が参加するまでに対象が拡大しています。そのような自治体規模の実践へ向けて、1) 校内チームのメンバーと役割に関する検討、2) 実施に向けての研修プログラムの開発と効果検討、3) SWPBS の実行度 (Fidelity) に関する評価尺度の開発、4) SWPBS の効果を測定し、多層支援における個々の児童生徒のニーズを特定するためのデータ管理システムが必要であることを指摘し、我が国の学校教育において SWPBS を効果的に、そして持続的に実施するための具体的な提案を行いました。

桜美林大学の石黒康夫先生からは、「スクールワイド PBS を仕掛けた校長が公立中学校を去った後にも継続している要因」というテーマで、公立中学校の校長として実践されてきた SWPBS についてご報告いただきました。石黒先生の後、校長が数回代わり、さらに教職員が大幅に入れ替わった後も、学校文化として残り続けている SWPBS の実践をご報告いただき、さらに現在の校長、生活指導主任にインタビューした結果についてご報告いただきました。

山形県立鶴岡養護学校の園部直人先生からは「公立養護学校におけるスクールワイド PBS の定着に向けての工夫」というテーマで病弱特別支援学校における行動支援についてご報告いただきました。精神疾患や発達障害の特性を起因とする生活や学習での不適応行動や対人関係面の問題を示す児童生徒に対する SWPBS についてご報告をいただき、「生徒指導体制の確認」、「基礎理論である ABA の教員研修の実施」、「生徒指導上の課題解決のための職員会議の実施」などといった人事異動に耐えうるポジティブな生徒指導の仕組みづくりについて議論を深めていただきました。

大阪府寝屋川市立啓明小学校の松山康成先生からは「公立小学校におけるクラスワイドから

スクールワイド PBS への発展」というテーマで、小学校においてクラスワイドで集団随伴性を活用した授業における私語の減少と授業準備率の向上を目指した PBS に取り組み、その実践の成果を学校全体で共有し、SWPBS へ発展させていった実践についてご報告をいただきました。特に実践を児童の委員会活動や特別活動として位置づけ、子どもの主体的な取り組みとなるよう工夫した点について詳細に解説をいただきました。

星槎大学の三田地真実先生からは「APBS-Japan の活動概要」というテーマで、2017年3月に設立された日本ポジティブ行動支援ネットワークの設立経緯、活動内容、今後の展望についてご紹介いただきました。さらに、岐阜大学の平澤紀子先生と名古屋市立大学の枝廣和憲先生からの指定討論で日本におけるスクールワイド PBS の発展と継続性を支えるものについて、いくつかの論点をあげていただき議論が深められました。

また、昨年と同様、今回のシンポジウムにおいても、フロアの方々にも近くの人同士で感想や意見を交換していただく「バズ・セッション」の時間を設け、さらにその内容を紙に書いていただきました。以下に、その概要を箇条書きで示します(似たような複数の内容をまとめたり、文言を少し修正したりしています)。

- ・実践を進める中でデータを取って改善していないときにどのように対処したらよいか難しい
- ・数値化しにくい成果もあるのではないかと考えた
- ・SWPBS の目標設定のやり方や教え方は、子どもにとっても先生にとってもわかりやすい
- ・徳島県において地域全体で実施しようとしているのは凄いと思った
- ・SWPBS の成果は、学校の何を変えたことによるものなのか?
- ・SWPBS を実施することの職員のメリット

は何なのか？反発はないのか？

・取り組みや成果に対する地域や保護者の評判は？

・標的行動の妥当性（給食の完食など）についてはさらに検討する必要がある

・実践の途中で子どもたちが自主的に取り組み出す段階に至るところが素晴らしい

・三田地先生の「教職課程に ABA に関する内容を含めるべき」というアイデアに賛同する

・特別支援学校においても SWPBS に取り組みると知ることができ励みになった

・シンポジウムには「発見」と「交流」という機能があると思った

・教師の負担感や「やらされ感」が気になった

・SWPBS の一番最初の導入部分をどのように行えばよいのか具体的に知りたいと思った。

昨年同様、たくさんのご意見をいただき本当にありがとうございました。この場をお借りして皆さまの積極的なご参加に改めて感謝申し上げます。

げます。

SWPBS に興味を持っていただき可能性を感じていただきながらも、具体的な懸念事項についてご指摘いただいたと考えます。SWPBS に関わる「導入」、「研修」、「データの扱い」、「目標設定の妥当性」、「地域との連携」など、これから実践的にも研究テーマとしても取り組んでいかなければならない課題が山積していています。

しかし、日本においても行政・自治体を巻き込んだ持続性のある成果が着実に報告され始めています。今後のさらなる実践や研究によって、今回テーマとした「発展と継続性を支える」ためのピースが埋められてくれば、さらに加速度的に SWPBS が発展・普及していく可能性は十分に考えられます。行動分析学の知見を学校教育へ効果的に応用し、子どもたちや学校関係者の「正の強化」を増やしていくことができるよう、一步一步、歩みを進めていきたいと考えています。

<第26回行動数理研究会：報告>

行動数理研究会：〈弱いロボット〉に関する講演

佐伯 大輔
(大阪市立大学)

井垣 竹晴
(流通経済大学)

2018年8月27日に同志社大学で、第26回行動数理研究会が開催されました。この研究会では、研究発表以外に、行動分析以外の研究分野から専門家をお呼びし、ご講演を頂く「教育セッション」を行っております。今回は〈弱いロボット〉の研究で有名な、豊橋技術科学大学の岡田美智男先生にご講演頂きました。講演では、「床に落ちているゴミを、周りの人に拾って入れてもらうゴミ箱型ロボット」など、不完全さを人に補ってもらうロボットの紹介がありました。この〈弱いロボッ

ト〉の考え方は、コミュニケーションを促進するための環境要因を考える上で、斬新な発想を提供するものであり、行動分析学者にとっても、示唆深いものと思われます。今回の講演に出席された方のうち、3名の方から講演への感想をお寄せ頂きましたので、ご紹介いたします。なお、〈弱いロボット〉については、下記の岡田先生のご著書に紹介されています。

岡田美智男(2017)「〈弱いロボット〉の思考—わたし・身体・コミュニケーション—」 講

談社現代新書

〈弱いロボット〉と自発促進随伴性

慶應義塾大学 坂上貴之

第26回行動数理研究会の教育セッションでご講義くださった岡田美智男氏（豊橋技術科学大学教授）の「周りを味方にする〈弱いロボット〉の研究とその展開」は、少なくとも行動分析家にとって、随伴性の設計という観点から深い洞察を与えるものとなった。氏の展開されていた考え方自体は、ご自身もお話になっていたように、Gibson J. J.のアフォーダンスやそれに影響を受けた Norman, D. のデザイン論、Thaler, R. H. のナッジ(nudge)と深く関連している。これらの考え方は、これまでも決して行動分析学に影響を与えなかったわけではない(Morris, 2009)が、その実験や概念を大きく変えていくほどの力は持っていなかった。その1つの理由は、こうした概念の示す環境と個体との相互関係を、組織的実験的に変容する手段を当時の私たちが持っていなかったためであろう。

そして現代である。少なくとも「ゴミを捨てる」という行動の機会を、岡田氏の「ゴミ箱」ロボットは設定することができた。このロボットは、「誰かが援助しないとただふらふらそこらをゆっくりと動いている」が、そうした限られた行動しか「しない」ところに特徴があった。取り巻く子供たちに何かを語り掛ける(教示する)こともなければ、ゴミを捨てさせるような動作の模倣もなかった。あるとすればヒトがゴミを入れることを可能にするような、Norman のいうアフォーダンスや(暗黙的な)シグニファイア程度であった。(おそらく製作者の意図としては、それらさえも除去したかったであろう。)

こうしたゴミ捨て行動が自発される「ダイナミックに変化する」環境(の一部)における、組織的な独立変数の操作は大切である。

子供たちが面白がってごみ以外の大切なものまでも「捨てる」ことになっては困るし、すぐに飽きて無視するようになっては困る。また、ゴミ箱ロボットがいないと散らかし放題となったり、何も無いところでは自分でゴミを持ち帰るといった行動が消去されたりしても問題となろう。しかし、この操作と反応の変容の観察に基づく随伴性の改善は行動分析家の仕事であろう。

おぼつかない発声を通じてのロボットとのおぼつかないコミュニケーション場面で、ヒトが言語行動を自発することも、多くの示唆に富んでいる。「情報量」が少ないことがヒトの疑問に関わる言語行動を増加させることはともかくも、おぼつかなき、たどたどしさ、カタコトであることもまた、ある種の言語行動とノンバーバル行動を自発させることが観察できる。こうしたヒトからコミュニケーション行動をつくりだしているのも、ロボットに仕組まれた随伴性であることに私たちは注目すべきだし、また新しいタイプの環境の設計として利用可能な時代に入ったと考えるべきであろう。過去にあった、「人工無能」(クライアント中心療法的オウム返しプログラム)から、時代は確実に進展している。異国人がもてなしを受けるといって、広く世界に見られる風習もカタコトのコミュニケーション場面に埋め込まれた強化子ゆえなのかもしれない。

最後に私はユニバーサルデザインやバリアフリーの問題と〈弱いロボット〉との関係について質問させていただいた。岡田氏からの返答にあったようにバリアフリーといった、自発されにくい生活に必要な行動を積極的に育てるような環境の整置の在り方は、まだ残存している可能性を引き出すうえでは、もっと真剣に考えられてよい。その意味で、〈弱いロボット〉は弱い随伴性ではなく、強力で重要な随伴性といえよう。

最近ではアイボとイヌとを一緒に過ごさせ

てそれを観察する研究などが工学者を中心としたチームで始められている。ルール支配行動の形成も含め、ロボットによる環境創出が新しい随伴性を発見できる手がかりになる可能性を、行動分析家はもっと考えていってもよいだろう。

Morris, E. K. (2009). Behavior analysis and ecological psychology: Past, present, and future. A review of Harry Heft's Ecological Psychology in Context. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 92, 275-304.

岡田先生のご講演についての感想
愛知文教大学 黒田敏数

行動分析学が一般の人たちに受け入れられにくい要因として、「行動の制御」が考えられる。他の誰かに、自身の行動を制御されることに対して、抵抗があるようだ。研究者が行動を 100%制御できる技術を仮に得たとしても、その果てには「支配」が待っていると、きっと一般人は考えるだろう。

(岡田先生が講演の中で言及したことはないが) ロボット工学の歴史も同じようだ。人工知能に対する疑問や不安は、今に始まったことではない。「ロボット」という言葉が初めて使われたチェコの戯曲「Rossumovi Univerzální Roboti」(カレル・チャペック作、1920年)では、ロボットが人間に代わる労働力として導入されたが、反乱を起こして人間を襲ってくる。ロボットはいつか人間よりも優れた知能を得て、人間を支配してしまうのではないかと? そういった漠然とした不安は、これまでに様々な作品で描かれてきた。

さて、前置きが長くなったが、岡田先生が今回紹介された「弱いロボット」には衝撃を

受けた。手足がなく自分でゴミを拾えないゴミ箱ロボット、オドオドしながらティッシュを配るロボット、うんうんと頷くだけの豆腐型ロボット。いずれも、とても人を襲ってくるような怖いロボットには見えない。それでもゴミ箱ロボットは、ゴミが拾えず困った様子でいると、周囲の人たちに「ゴミを(代わりに)拾う」という行動を自発させる。普段、ティッシュ配りを素通りする人でも、相手がオドオドしたロボットであれば、受け取りやすくなるのではないかと。こういったことを意図して、ロボット製作に取り組んだのだから、「行動の制御」には違いない。しかし、この種の行動に制御に抵抗を感じる人はあまりいないだろう。

オペラント条件づけによる「行動の制御」が、世の中にもっと受け入れられるようになる・・・そのヒントが、「弱いロボット」にはあるのかもしれない。そう考えさせられる講演内容であった。

岡田先生のご講演についての感想
滋慶医療科学大学院大学 東辻保則

岡田先生のご講義を受けて感じたことは、私は病院で働いているからこそ、弱い(病気である)立場にいる人(ロボットであっても)を助けたいと思うのが私達の性分だと思っています。ですから、行動分析学がそのような方向性になることが可能であれば、病院で働いているスタッフはこのような素敵な学問を今まで以上に興味を持たれるのではないかと考えました。

私はまだまだ行動分析学という学問を深く理解出来ておりません。しかし、行動分析学を今まで以上に深く学ぶことで今後の私の研究に向き合う事ができると実感しております。

今回の一日は凄く有意義であり今後の人生に深く関わって行くように感じました。

本当にありがとうございました。

<春の学校：開催記>

2018年度 行動分析学会

春の学校を終えて

野田 航
(大阪教育大学)

日本行動分析学会若手会委員の野田航です。昨年度に引き続き、行動分析学会春の学校が同志社びわこリトリートセンターにて開催されました。2019年3月9日・10日の二日間に渡り、28名の参加者とともに行動分析学の学びを深めました。私自身は前回の春の学校に参加していなかったため、新鮮な感覚で参加させていただきました。その分、準備や進行については参加者の皆様や講師の先生方、同じ若手会委員やサポートメンバーの方々に多大な迷惑をおかけしたかと思えます。この場を借りてお詫び申し上げます。

今回の春の学校では、若手会委員からの講義を増やしながらかも(4つ)、前回同様に素晴らしい4名の先生方(松見淳子先生、吉野俊彦先生、佐伯大輔先生、三田村仰先生)にご協力いただきました。素晴らしい講義の時間はもちろんのこと、休憩時間や懇親会等でも積極的に参加者とお話くださり交流を深めてくださったこと、改めて御礼申し上げます。

会場の同志社びわこリトリートセンターは、琵琶湖のほとりにある大変自然豊かな場所で、春の学校のような企画にはピッタリの場所だったと個人的には思います。建物は美しく設備も充実しており、場所としては非日常的な感じで集中しやすさもありつつ、充実した設備で



とても学びやすい空間でした。何より食事がとても豪華で美味しかったことが個人的な春の学校の思い出です。

今回の春の学校では、7つの講義が実施されました。初日の講義は吉岡昌子先生の「組織行動マネジメント」から始まりました。組織行動マネジメントは、日本語でもいくつかの書籍はありますが、あまり学会で発表されたりすることは多くない印象があります。吉岡先生のお話の中でも、Darnell Lattal先生のお話や実際に吉岡先生が受けたワークショップのお話は、なか

なか書籍などからではわからない部分も多く、組織に対して行動分析学をどう応用していくのかの実例がよくわかりました。

2 限目は、佐伯大輔先生による「遅延価値割引・衝動性」に関する講義でした。遅延価値割引の数理モデルに関する基礎研究をわかりやすく丁寧に紹介してくださった後、遅延価値割引と衝動性、セルフコントロールとの関連について具体的な例をあげながら研究の課題などをご紹介いただきました。今回の参加者には応用領域の実践家や研究者の方が多くいらっしゃったので、価値割引の応用可能性にも触れながら学びを深めていただきました。

3 限目は大月友先生、三田村仰先生、大屋藍子先生による「RFT と ACT ワークショップ」でした。まず大月先生から「メンタルヘルス問題の行動分析的な理解（1）：関係フレーム理論（RFT）編」として、関係フレーム理論についての非常にわかりやすい解説があり、関係フレーム理論からメンタルヘルスを理解する方法についてご紹介いただきました。大屋先生からは「メンタルヘルス問題の行動分析的な理解（2）：行動変動性・ルール支配行動編」として、まずルール支配行動の観点から、ルールがスケジュール感受性を低減させ、行動の変動性が狭まり不適応的になっていくことを説明いただきました。その後、行動変動性を増大させることがスケジュール感受性を高めること、ACT プロセスと行動変動性の関係について事例を含めて解説いただきました。最後に、三田村先生から「臨床行動分析を事例で考える：RFT と変動性から嘔吐恐怖への事例について考える」として、嘔吐恐怖の事例を提示いただきながら、その事例を「行動分析的にどう理解しうるか」ということをワークショップ形式で進めていただきました。特に「価値」についての議論は、2 日目も継続的に議論のテーマとなりました。

初日の夜には懇親会が開かれ、あまり広くない部屋にほとんどの参加者がギューギューに

なりながらも楽しくかつ熱く議論を交わしていました。自由参加という形ではありましたが、多くの参加者が集まって様々な交流が行われました。解散もフリーでしたが、かなり夜遅くまで議論をしていた方もいらっしゃったようです。

2 日目の 1 限目は私が「学校における実践研究から考える行動分析学の可能性」と題した講義を行いました。学校現場で行動分析学に基づく実践を行う方法について、スクールワイドポジティブ行動支援と介入に対する反応性モデルについての実践を紹介しました。そして、それらの経験から、学校現場の随伴性を分析した上で「学校システムそのものを問い直す」ことがこれから大切ではないかと提案しました。最後に、自分自身を取り巻く随伴性を徹底的に分析することで、自分がやりたいことができる随伴性を自ら作っていくことができるのではないかというお話をさせていただきました。少し大きな視野で随伴性をみる観点が伝わっていただければいいと思います。

2 限目は松見淳子先生による「行動分析学：多様性の時代における多様な個人とコミュニティに配慮した学問」という講義でした。なかなかお聞きすることができない松見先生のご経歴を紹介していただきながら、それぞれの時期における「気づき」についてお話しいただき、実践における「気づき」からそれを研究課題としていくことの重要性をお話しいただきました。それから、エビデンスに基づく実践への行動分析学の貢献の可能性や文化へのアプローチなど、幅広い観点から貴重なお話をいただきました。

3 限目は吉野俊彦先生による「私にとっての行動分析学の強化子」でした。「人間って何だろう？」という問いから学びを始め、行動分析学と出会って「刀を手に入れた」というお話など、これまでの吉野先生のご経歴のお話を含めながら、適応と不適応の捉え方、行動分析学によってクライアントのナラティブ（主観）と実

際の行動随伴性（客観）をつないでいくことができるというお話が印象的でした。

最後の4時間目は、丹野貴之先生が司会する自由討論でした。特に1日目と2日目で共通して出てきた「価値」ということについて、様々な意見が出されました。それから、若手会や学会に期待することなどについても参加者から意見が出されました。

運営側としてはあつという間の2日間で、それぞれの時間は刺激に満ち溢れていたと思います。終了後は正直なところ疲労困憊でしたが、

なかなか論文だけでは知ることのできないことが学べること、「行動分析学が学びたい！」という仲間が集まって議論できたことはとても素晴らしい経験でした。

開催頻度については未定ですが、今後も春の学校は継続していきます。これまで参加できなかった方も、これまでに参加して下さった方も、HP等で情報が出てきましたら積極的にご参加いただければ幸いです。よろしくお願いたします。



<春の学校：参加記>

春の学校に思うこと3題

井上和哉

(早稲田大学大学院 人間科学研究科)

福田実奈先生の Twitter に誘われ、春の学校初参加を決めました。琵琶湖近くの緑に囲まれた施設で、白熱した議論に接し、「行動分析学の基礎研究やその視点を少しでも学びたい」という当初の目的、それ以上の収穫と発見がありました。

春の学校に参加して、大きく三つの学びがありました。一つ目は、「研究はとても楽しいものである」ということを再確認できたことです。ありきたりな感想ではあるものの、教員業務や博士論文の研究に閉じている私に、研究の本質に立ち返る場となりました。

特に、吉岡昌子先生の組織行動マネジメントに関する講義について、先行研究を紹介される先生の姿はいきいきとされ、Aubrey Daniels 博士に直接、指導を請いにウェストヴァージニアまで赴かれた体験談も心に残っています。また、組織行動マネジメントの実践で、企業の収益や労働者のパフォーマンスを上げる研究は、スケールが大きく、夢のある話で、自身の視野が広がるとともに、研究の楽しさを実感する時間となりました。

二つ目は、「臨床研究を行う自らが、基礎研究者と交流し、研究を発展させなければならない」と刺激を得たことが大きな収穫です。春の学校では、臨床家と基礎研究者が研究領域の垣根なく、終日、議論を闘わせる研鑽の場となりました。また、臨床のテーマに対する基礎研究者の問いの立て方は新鮮で本質を突くものでした。その中で、「ACT で使用される価値とはどういうものなのか？」という問いもありました。大

月友先生は、「価値は、～というものと細かく詳細に決めるわけではなく、ある程度、余裕を持たせた内容であっても良い、その方が、少し価値から外れていそうな行動も包含することができる(行動の強化価を高めることに繋がる)」と回答されていました。この点についても、臨床を行う私にとって、気づきとなりました。さらに、三田村仰先生の嘔吐恐怖へのエクスポートの事例についても、議論が盛り上がっていましたし、関係フレーム理論を知っている方が会場の大半だったことも印象的でした。普段、認知行動療法や ACT を臨床で扱っている私ですが、基礎研究の成果に感度を上げ、科学と実践の学際的研究を行い、発展させていかなければならないと強く思いました。

三つ目は、「正の強化の大切さを再認識できたこと」です。この二日間、正の強化の大切さを認識している先生方と過ごしたゆえか、春の学校の参加前後で、自分自身の行動も変化が生まれました。例えば、後輩の論文への添削コメントについていえば、明らかにポジティブなフィードバックが増えました。さらに職場などでも、相手の出来ていない部分を指導するのではなく、少しでも出来ている部分を褒め、フェイディングできるような視点が強まりました。そのせいか、自分自身の対人関係も円滑になったように思います。以前、山本淳一先生は、「基本的に社会は消去の随伴性であるため、正の強化ができる仕掛けづくりが大切」と講演で話されていました。実際、図1の話にもあったように、正の強化で、行動を維持、拡大していくことの重要

性を再認識しました。罰コントロールが用いられがちな社会ですが、学校教育に対する PBS (Positive Behavior Support) のように、医療、産業など、社会のあらゆる場面に行動分析の視点を組み入れ、正の強化で社会をまわしていくというのが私たちの大きな役割であると感じました。

The Power of Positive Reinforcement



図1 Aubrey Daniels International 社のホームページより

春の学校では、学術的な知識だけではなく、研究者、臨床家として、重要な部分に気づかされることが多い場となりました。春の学校を運営して下さったみなさま、貴重な学びと出会いの機会を整えてくださり、心より感謝いたします。



図2 スマホに残っていた懇親会の写真

Note. 左から私、春の学校運営委員の伊藤さん、慶応の関根さん

<春の学校：参加記>

春の学校に参加して

伊藤 真子

(明星大学 人文学研究科)

去る3月9日から3月10日にかけて、同志社びわこリトリートセンターにて開催された「第三回行動分析学春の学校」に参加させていただきました。日本行動分析学会若手会企画のこの催しは、行動分析学への学びを深める絶好の機会であるとともに、同じように行動分析学に興味をもち、研究に邁進しておられる方々と一緒にできることへの魅力を感じたことが参加への動機となりました。

初めての参加ということで不慣れな部分もありましたが、2日間に亘ってまさに行動分析学にどっぷり浸かるようにして過ごすことができたことは、私にとっては掛けがえのない経験でした。そして率直に感じたことは、最初の第一回から参加したかった、ということです。実は第二回の「春の学校」にも参加させていただくつもりだったのですが、申し込みをした時点で既に定員に達していたため、

残念ながら参加は叶いませんでした。その反省を踏まえて、今回はエントリー受付開始と同時に申し込みました。その甲斐あって、会期中は名だたる講師の皆様による薫陶を受けることができました。どの先生も持てる知識を惜しみなく分け与えてくださったこと、僥越ながらここに深く感謝申し上げます。

1日目は初めて学ぶ事柄が多く、とても新鮮な感じがして話に引き込まれました。その中で一番印象的だったことは、着眼点を少し変えるだけで物事自体、随分と見方が変化するということです。講義を拝聴し、学問を通してある出来事を見ると解釈の仕方が変わり、そのように考えることも出来るのだ、ということを実感させられました。

さらに何より驚いたのは、講義終了後にグループで意見交換をしていた際、それぞれの捉え方や考え方が異なっていたことです。そのような多様な見方や見解を共有すること自体がとても楽しく感じられ、明確な答えが出ないまま次の講義までの間に他の参加者と意見を交わし合った時間は大変濃密な、充実したものとなりました。

また、夜の懇親会は、一つのキャビンに参加者が集まる形で行われました。すし詰め状態でしたが、キャビンの至る所から研究や仕事にまつわるお話が聞こえてくるという、非常に興味深い状況でもありました。私も実際に様々な職種の方々のお話を伺い、行動分析学や研究に関するよい刺激をいただきました。夜も更けるまで同じテーマで語り尽くした

(いや語り尽くせていませんが…)ことは、私の喜びとするところです。

そこで強く感じたのは、とにかく今は論文を書くべき時だ、ということです。はい、自覚しております。論文を書きます。目指す所は遙か彼方にありますが、まずは論文を書か

ないと何も始まりません。研究においては当然のことと承知しているつもりでしたが、まだまだ認識が甘かったと気が引き締められました。

続いて2日目には、行動分析学とは何であるのか、深く考えさせられました。私も未だに行動分析学の入り口に立った段階であり、学問として、また可能性や未来について、自分自身で見通すことはとてもできません。だからこそ、参加された皆様と熱く議論し、考えることができたのは貴重な経験でした。しかもそうするうちに私は、あることに気づいたのです。それは自分がこの僅かな時間の中で行動分析の世界にすっかりはまり込んでしまったということです。話を聞けば聞くほど面白さにも気づき、もっと学びたいと思っていたら、あっという間に全日程が終了していました。

今回の春の学校は、授業では学べないような内容に加え、他大学や現場で活躍中の皆様との意見交換などもさせていただきました。この経験は私にとって的確かつ良質の刺激であり、論文執筆への強化子としても機能しています。それと同時に自分の知識不足を痛感する場面もあり、さらに勉学に励み、次回は皆様とより高度な対話をしたいという目標もできました。未熟ではありますが、この経験を礎に日々成長していけたらと願っています。

最後にはなりますが、春の学校を企画してくださった行動分析学会若手会メンバーの皆様、熱心に講義をしてくださった講師の方々、同志社びわこリトリートセンター職員の方々、また様々なお話を共有させていただいた参加者の皆様にお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。また皆様とお会いできることを楽しみにしております。

<自著を語る>

哲學特集

坂上 貴之
(慶應義塾大学)

慶應義塾大学文学部には慶應義塾大学藝文学会、三田史学会、三田図書館・情報学会と並んで三田哲学会なる学部内の学会がある。この学会の特集号としてわたくしの退職記念号(哲學 第142集 2019年3月)を出していただいた。最終講義に来てくださったニュースレター編集長の眞邊一近氏の目にこの記念号が留まり、寄稿した方のほとんどが行動分析学ゆかりの人たちであったことから、記事を書いてほしいとの話をいただいた。

この記念号には、自分の巻頭言を除き、12本の論文が掲載されている。以下、題目(著者名)を掲げ、簡単なコメントを付す。いずれは慶應義塾大学のレポジトリに収められることになる。

1) 徹底的行動主義について(丹野貴行)

方法論的行動主義、操作主義、認知主義との対比から Skinner の論文に立ち戻りつつ徹底的行動主義を改めて位置づけようとした論考。

2) 目的論的行動主義における心的概念の理解(石井拓)

徹底的行動主義の先へと進む考え方の1つである Rachlin, H. の目的論的行動主義を、永井均の内包概念に拠りつつ検討する。1)と同様、概念的な分析であるが、こうした論考は現在の日本の行動分析学にも最も欠けている部分であるように思う。

3) Do preference pulses after reinforcement occur due to its a priori run structure or to its own local effects? (Yosuke

Hachiga)

2選択肢の下で反応する個体は、強化直後に強化子を得た選択肢側で強化後に再び反応を続け、その後次第に他の選択肢へと反応を移行する。この選好パルスの由縁についての実験的検討。

4) 反応復活とマッチング法則: Rac モデルの解説(藤巻峻)

2選択肢の一方で強化されたのち消去され、その時に他方で強化された個体は、その後両方が消去されると、最初に強化された側に反応を再び行う。この反応復活現象を説明するモデルの1つが Rac モデルであるが、その基盤となっていた行動モメンタム理論が放棄されるに至った現時点での、モデルの評価を考える。

5) 社会割引研究の現状と展望(井垣竹晴)

時間割引、確率割引とともにこれまで行動分析学や行動経済学で取り扱われてきた社会割引を、他の割引との関連にも重点を置いて考察。

6) ルールの変更経験は強化への感受性を増加させる(山岸直基)

ヒトでの強化スケジュールを考えるうえでルール支配行動(教示追従行動)の重要性は無視できない。そのルール自体が変更となった時、ヒトの行動はどのように変容するのかを取り扱った実験的研究。

7) 自閉症スペクトラム症における他者感情認知障害に対する行動的観点(松田壮一郎・山本淳一)

自閉症スペクトラム症の特徴の1つといわれる他者感情認知障害の認知的機構や神経組織による説明を簡潔にまとめた上で、行動的説明をこれらに對置させた論考。

8) 看護学への行動分析学の貢献 (鎌倉やよい・飛田伊都子)

看護は、他の医療場面での活動と同様に、応用行動分析学の重要なフィールドの1つでありながら、これまで日本では大きな進展を見なかった。看護学と行動分析学との関係から出発し、患者行動とセルフコントロール、医療安全の問題についてレビューする。

9) ライフヒストリー曼茶羅ワークショップ—他者を理解するという— (三田地真実)

行動分析学はその基本的な方法を量的な研究方法に拠っている。しかし言語行動、それも複数人で行うライフヒストリーについてのワークショップでの行動の制御となると、他の分野で得られた成果を利用していく以外にはない。ファシリテーション分野での実務経験に基づくライフヒストリー言語行動の実践研究。

10) ウェブ調査における回答者のニューメラシーと質問の種類による中間回答傾向の違い (広田すみれ)

リテラシーを、文字(や言語)を処理するスキルとすれば、ニューメラシーは、一般に数や量を処理するスキルをさす。このスキルと、調査での回答が中間選択肢を偏る傾向との関係を取り扱ったウェブ調査研究。中間選択も立派な選択行動である。

11) 心理尺度の回答カテゴリに関する検討 (増田真也)

10) と共に最近の坂上の回答行動研究での共同研究者。心理尺度は何巻ものハンドブックが出るほど心理学研究者にとってポピュラーなものであるが、果たして、それへの回

答行動は参加者の「心」を正確に測っているのだろうか。心理尺度という測定装置に関する研究。

12) 擬人主義はまじな科学研究プログラムか—最節約性と統計的仮説検定に基づく議論— (森元良太)

モーガンの公準で切られたはずの擬人主義。霊長類の行動研究や進化心理学では、その復活の兆しが見られる。氏の専門は生物学や進化をめぐる科学哲学だが、一時、坂上と擬人主義についての研究会を開いていた。心理主義と同様、擬人主義は手ごわい。

さてわたくしは巻頭言にかえて、「塵芥雑話」と題する雑文を掲載した。大学教育に関する改革への憾みを吐露したものであるが、ようやく、あまり周りを気にしないで、ものを書ける身分になったといえる。思えば、昭和から平成に移行する際の異様な自粛騒ぎについて触れた「アメリカそして日本」(1989, 三色旗, 5月号(第494号), 24-26)は、この程度でも結構物議を醸すものと正直、自由闊達、談論風発の学風を愛する者として哀しくなったものである。その時分から、もう30年近く経過したことになる。

この「塵芥雑話」という題目と同じ最終講義を2019年3月22日に行った。自分よりもすでにずっと先に進んでいる、博士号を取得した井垣、石井、丹野、藤巻、増田各氏にご登壇いただき、ご自身の博士論文、現在の研究、そして行動分析学あるいは心理学についての考えなどのお話を伺いながら、坂上の研究にちょっと触れるという趣向であった。そして、「行動分析学はどんな心理学をやるべきか、どんな心理学をやってはいけないかを教えてくれる学問である」という何人かからの発言に、改めて蒙を啓かれる思いがした。

「日本行動分析学会若手会」のご報告

日本行動分析学会若手会委員長

丹野貴行

(明星大学心理学部)

2017年1月より発足した「日本行動分析学会若手会」について、2017年度と2018年度の2年間の活動を終えましたので、この場を借りてこれまでの活動内容をご紹介します。また今後の組織変更についても併せてご報告をさせていただきます。

若手会の活動理念は、日本国の行動分析学の若手育成に資する活動を提案・実施し、またそうした活動を通して研究室や専門分野を超えた若手間のつながりをつくることです。具体的な活動は以下の通りです。

① 年次大会における「若手研究者口頭発表セッション」と「若手研究者優秀発表賞」

近年の行動分析学会年次大会では口頭発表の枠が用意されていません。一方で他の学会では、若手向けの口頭発表の枠が用意され、賞まで設定されている場合もあります。行動分析学の色が強い研究ほどそうした他学会での発表が難しくなりますので、それを専門とする若手の競争力を相対的に失わせる結果となっていました。そこで、2017年度の第35回年次大会（於コラッセ福島）において、若手会の自主企画シンポジウムとして「若手研究者口頭発表セッション」を開催しました。そしてこれを事例として、理事会・代議員総会でのご賛同の下、2018年度の第36回年次大会（於同志社大学）より、学会公認の企画としての「若手研究者口頭発表セッション」の実施と、そのセッションでの発表内容に基づく「若手研究者優秀発表賞」を設置させていただきました。受賞者のコメント等につきま

しては他のニューズレター記事をご参照下さい。今後も若手の皆様からの多数の発表申し込みを期待しております。

② 行動分析学春の学校の開催

2014年度に開催された「行動分析学冬の学校」を踏襲し、2018年3月3日～4日に慶應義塾大学日吉キャンパスにおいて、また2019年3月9日～10日に同志社大学びわこリトリートセンターにおいて、「行動分析学春の学校」を開催しました。行動分析学に関わる大学院生や一般の方を主たる対象として、トレーニングキャンプ形式で、教科書から一歩進んだ行動分析学の知識を学んでいただきました。詳しい開催記につきましては他のニューズレター記事をご参照下さい。また今後は2年に1度の頻度で開催させていただく予定です。

③ 日本行動分析学会への要望・意見書の提出

今後の日本行動分析学会において必要であると考えられる事業・活動等についての要望書を理事会に提出しました。これまで、公的メーリングリストの整備や学会HPの充実などをお願いさせていただきました。

④ 構成員・組織変更について

若手会は、2016年度の日本行動分析学会第34回年次大会（於大阪市立大学）において、理事会より私丹野が委員長に指名され、その後委員やサポートメンバーを募る形で始めました。渉外委員会の下部組織であり、またイベントの企画・実施においては企画委員会

と協力して活動する組織です。発足メンバーはニューズレターNo. 88に記させていただきました (<http://www.j-aba.jp/newsletters/n188h.pdf>) が、その後も若手会の理念や活動にご賛同いただける方々にご入会いただきました。2019年3月現在の構成員は次の通りです。

委員 (所属) :

大月友 (早稲田大学) ・大屋藍子 (同志社大学) ・久保尚也 (駒澤大学) ・黒田敏数 (愛知文教大学) ・丹野貴行 (明星大学) ・野田航 (大阪教育大学) ・松田壮一郎 (筑波大学) ・吉岡昌子 (愛知大学)

サポートメンバー (所属) :

近藤鮎子 (エルチェ (株)) ・福田実奈 (同志社大学) ・藤巻峻 (早稲田大学/慶應義塾大学)

さて、こうした委員、サポートメンバーの選出基準ですが、本会における若手の定義は40歳未満としました。また、若手会の活動そのものが負担となり研究や就職を妨げてしまっただけでは本末転倒ですので、委員については任期無しもしくはそれに近い立場での常勤職に就いている者としています。一方で、次代の若手会への引継ぎも必要となりますので、後期博士課程やポストドクターの方々にも、サポートメンバーという立場でご参加いただいています。そして委員交代は2年を目途に考えるということにしました。

そしてこの度その2年が経ちましたので委員交代について審議し、上記委員のうち大月先生、吉岡先生、そして丹野が2019年3月をもって若手会を退会することとなりました (ちなみにこの3名は同学年でありまあそういうことです)。また、私の後任の委員長として、残っていただける委員・サポートメンバーの互選により、松田先生が選出されました。松田先生は、当初はサポートメンバーとしてご参加いただき (博士号取得おめでとう!)、

その後委員へと移り (テニユアトラック獲得おめでとう!)、そして今回の委員長就任ということになります (とにかくおめでとう!)。

⑤ 最後に

若手会委員長のお話をいただいた当初は何をやればよいのか皆目見当がつかず、大会時に適当なシンポジウムを企画すればよいであろう、そしてその後に打ち上げをやってアルコールが入れば若手同士で勝手に仲良くなれるであろう、ぐらいにしか考えていませんでした。しかしながら、たしか三田の沖縄料理屋だったと思うのですが、ほどよく酔った私は数名の委員・サポートメンバーに周囲を囲まれつつ「口頭発表セッションを実現せよ」という熱い説得 (半ば脅迫...) を受け、その実現に向けて駆け回りました。同じように、春の学校についても当初は「まあやればよいねゆっくり考えようね」ぐらいだったと思うのですが、学会関係者と話しているうちにこれもいつの間にか若手会主体ですぐに行うことになり、同じく駆け回ることとなりました。特に後者は小さな学会大会を行うようなものですので、多大なる事務処理に追われました。きわめて主体性が無く、企画力も無く、ただ調整役と事務処理に徹する委員長であったと思います。このようなふがない委員長であったにも関わらず、おかげさまで若手会活動が上記のような一定の成果を挙げることができましたのも、私の呼びかけにに応じていただいた若手会委員・サポートメンバーの方々のご協力と、そして理事の先生方をはじめとする学会全体からの温かいサポートと励ましがあればこそでした。この場を借りて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

新委員長の松田先生は、私とは異なり主体性・企画力に富む方です。また、現在の委員・サポートメンバーの多くの先生方にも引き続き若手会に残っていただけることとなりました。

た。この新体制の若手会が、若手をより一層輝かせ、日本の行動分析学のさらなる発展へと繋がる強化随伴性を整えてくれるものと期待しています。今後とも皆様の若手会活動へ

のご理解とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

編集後記

新年度を迎え、一月近く経ちましたが、いかがお過ごしでしょうか。本年は5月に平成から令和へと改元されることもあり、本号が平成最後のニューズレターとなります。

本号では、学会記事、研究会報告、春の学校、著書紹介、若手会報告と多岐に渡る記事を掲載することができました。どの記事も大変興味深い内容となっております。

ご寄稿いただきました先生方、大学院生の皆様、快く依頼をお引き受けいただきありがとうございます。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

ニューズレターではこれまで連載してきた各種記事だけでなく、新しい企画の記事についても募集しております。皆様からのご寄稿をお待ちしております。

(KK)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

● ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなく載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

● ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。
● 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866

日本大学生物資源科学部心理学研究室

日本行動分析学会ニューズレター編集部

眞邊 一近

E-mail: manabe.kazuchika@nihon-u.ac.jp